

長柄・桜山第1・2号墳覚書

伊丹 徹

緒言

はじめに

- A. 関東各地における古墳出現期の状況
- B. 弥生時代後半から古墳時代前期初頭の人とモノの移動
- C. 長柄・桜山第1・2号墳の成立基盤

D. 長柄・桜山第1・2号墳の特徴

E. 東海道と東山道

結論

補論

おわりに

補記・文献

緒言

長柄・桜山第1号墳は1999年3月に逗子市と葉山町の行政界をまたいで発見された。近隣に住んでおられる東家洋之助氏が埴輪片を採集したのが契機となり、横須賀市人文博物館の大塚真弘・稻村繁両氏が埴輪を確認された。その直後に県教育委員会によって周囲の分布調査が行なわれ、500m西の相模湾を望む丘陵端でも古墳らしき高まりが確認された。田村良照氏も同時にこの高まりを古墳らしいと見極めている。しかし立ち木が繁茂していることと埴輪が明瞭でなかったため県教育委員会がトレッチを2本入れたところ葺石と埴輪が出土し第2号墳と命名されるに至った。その後、県教育委員会による第1号墳の測量調査、かながわ考古学財団による第2号墳の測量と両古墳の墳形を確認するための発掘調査が行なわれ、この結果について既に報告書が刊行されている（柏木・依田2000）。発見から時を置かずしてこの古墳の重要性に鑑み、識者によって講演会やシンポジウムなどで触れられることが少なくなかった。また県・市・町は協力して両古墳が国の指定史跡になるべく努力しており、地権者のご理解や逗子市議会議員・葉山町議会議員の有志で結成された逗葉議員懇談会および古墳をまもる会など住民の支援も頂戴している。はまかぜ新聞には関連記事を連載していただき、市・町では小さな展示会（町：2001年12月～2002年1月、市：2002年1月）や講座（市：2001年11～12月、町：2002年2月）を開き、広報紙等でも存在をアピールしているところである。

ここではその現状での評価について述べてみたい。「長柄・桜山第1・2号墳～概要および現段階での評価」と題するレポートの素案（本稿「はじめに」から「結論」までの部分）については榎渕規彰・佐藤仁彦両氏とともに検討し、堀江道子・鈴木次郎・加部美智子・穂元芳男・鈴木和雄の諸氏の校閲を受けたこと、榎渕・工藤一路・永田寛夫・佐藤・行谷正茂の諸氏と行なった簡易測量調査から知見を得たこと、大塚初重先生の講演や稻村繁・岡村道雄・臼杵勲・禰宜田佳男の諸氏から教示を得たことを明記し、試堀・発掘・測量に関わった県教育委員会・かながわ考古学財団の諸氏にもお礼申し上げます。なお補論の一部は三浦半島文化財保護連絡協議会（葉山町にて2001年12月21日に開催）で口頭発表したものである。

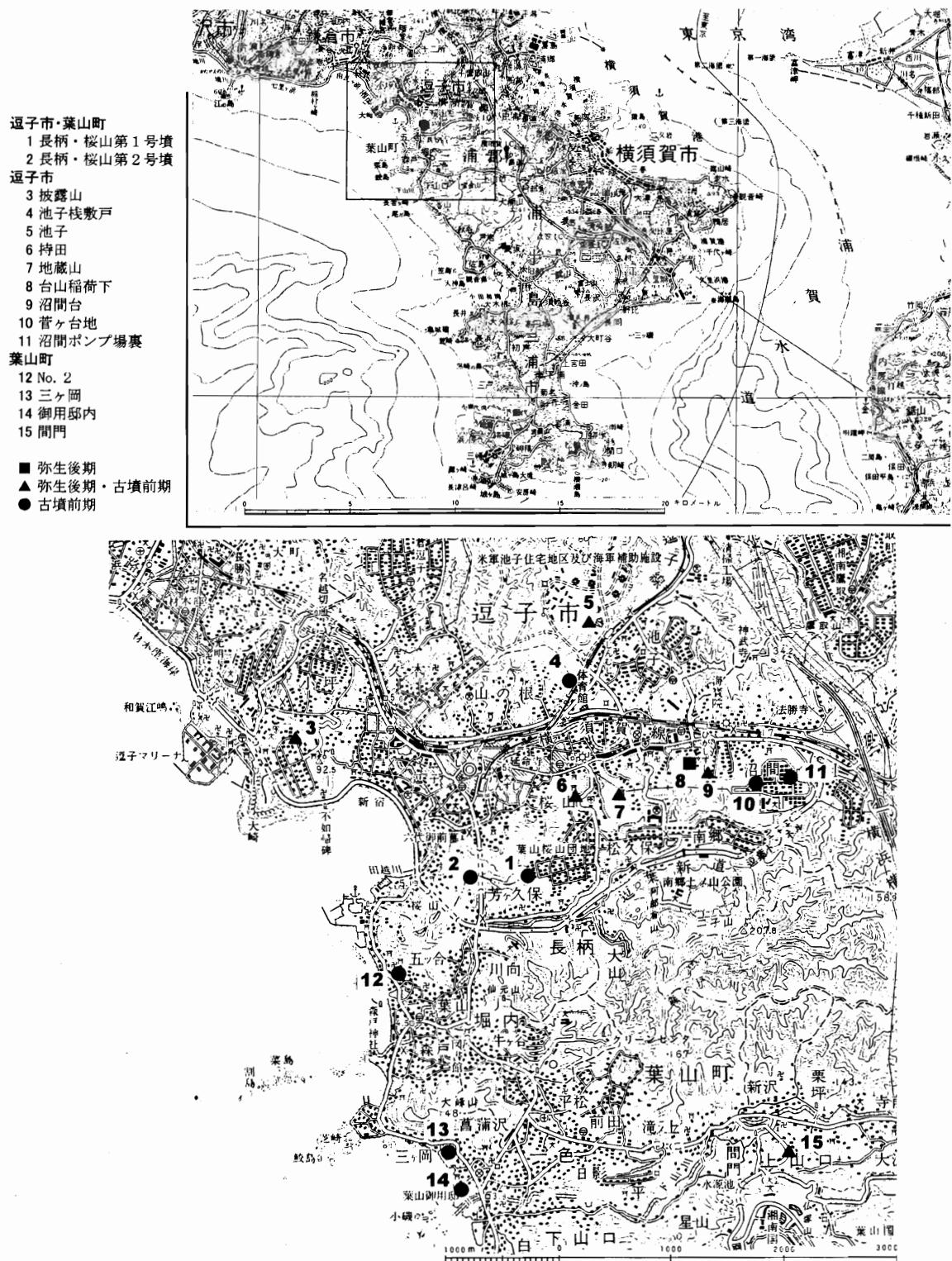


図1 長柄・桜山第1・2号墳位置図 上 [1/30,000] 下 [1/5,000]

はじめに

この古墳で重要と考えられることを列記すれば次のようになる。

- 両古墳ともほぼ完存しており、未盗掘の可能性もある（特に第1号墳）。
- これまで古墳分布空白地帯での常識を翻す新発見である。
- 両古墳とも大形の前方後円墳である。第1号墳は全長90m、第2号墳は88mを測り、県内で現存する古墳では最も大きい。
- 両古墳から埴輪が出土し、その年代は共に4世紀中頃から後半のものである。
- 第1号墳の埴輪は壺形埴輪と円筒埴輪（もしくは朝顔形埴輪）、第2号墳は壺形埴輪を主体として一部に円筒埴輪（もしくは朝顔形埴輪）および土師器壺形土器を伴なう。
- 第2号墳は墳丘に葺石が認められ、関東の前期古墳としては稀有な例である。
- 両古墳とも三浦半島の基部、逗子市・葉山町の境をなす丘陵上に約500mを隔てた近接した場所に築造されており、それぞれ東京湾・相模湾を眺望する位置にある。

ではこれはどのような評価につながるのであろうか。要旨を箇条書きでまとめてみた。

- A. 関東各地における古墳出現期の状況から、長柄・桜山は東海道筋の古墳の動向と軌を一にして出現すること。
- B. 弥生時代後半から古墳時代前期初頭の人とモノの移動から、広汎な物流があり、その中で長柄・桜山の成立を考えるべきであること。
- C. 長柄・桜山第1・2号墳の成立基盤は交通の要衝に立地すること。
- D. 長柄・桜山第1・2号墳の特徴は畿内の定型化した古墳に近似するということ。
- E. ヤマト政権の東国経営の根幹である東海道ルート上に位置する長柄・桜山第1・2号墳は、ヤマト政権に直結する象徴として築かれたと考えられること。

古墳時代の始まりについては長らく議論の対象とされてきており、最古の古墳に対する見解も様々である。なお以下の記述は古墳時代は箸墓古墳など定型化した前方後円墳の出現によって始まるという見解に従う。よって発生期古墳・出現期古墳という用語は使用せず、布留式より前の墳丘を有する墳墓は「墳丘墓」と呼ぶ。つまり前期古墳が最古の古墳であるという前提である。古墳出現期といった場合、それは前期の初頭を意味する。弥生・古墳時代の近畿と南関東の土器様式については次の図式を用いる。

弥生時代後期 前半：第V様式前半／久ヶ原式
後半：第V様式後半／弥生町式・古
終末期：第VI様式＝庄内式（纏向式の一部）／弥生町式・新
古墳時代前期 布留式／土師器

また庄内式は西暦250～300年頃の3世紀後半、古墳時代前期・布留式は300年前後以降と考えておきたい。ではAから順次その内容を補足してみたい。

A. 関東各地における古墳出現期の状況

常陸では4世紀後半から古墳の本格的築造が始まり、前方後方墳の勅使塚が認められるものの、主体となる墳形は大場天神山・鏡塚・長辺寺山など前方後円墳である。

下野の造墓活動は4世紀前半からで、大半が茂原大日塚・愛宕塚・権現山、三王山南塚（1・2号）、駒形大塚・吉田温泉神社・那須八幡塚、浅間山・亀の子塚・上根二子塚（1・2号）などの前方後方墳であり、4世紀中頃から後半も上・下侍塚、藤本觀音山、山王寺大樹塚などの大形前方後方墳が主体となり、大形前方後円墳・円墳は5世紀まで築造されない。

上野では4世紀前半から中頃に元島名將軍塚・前橋八幡山・寺山などの前方後方墳が築かれたのち、前橋天神山・大鶴巻・太田八幡山・朝子塚・本矢場薬師塚といった前方後円墳に転換する。

北武藏では4世紀後半に塩（1・2号）・鷺山・諏訪山（29号）・山の根（1号）などの前方後方墳が造られ始め、5世紀に至って長坂聖天塚・金鑽神社などの円墳および高坂諏訪山・天神山・野本將軍塚などの前方後円墳に変わる。その中で稻荷山古墳群が形成されるようになる。この地域では埴輪は5世紀にならないと出現しないようである。

南武藏では芝丸山の例があるが、多摩川下流域に前方後円墳が群をなして築造され始めるのが4世紀後半で、右岸に白山・觀音松、左岸に亀甲山・蓬萊山と100m前後のものが対峙する。これらの古墳から埴輪は発見されていない。これらよりやや上流では、左岸に砧中学7号、右岸に稻荷前6・16号が続く。

相模では3世紀後半から相模川中流域左岸に秋葉山古墳群（前方後円形を呈した4基で一部は弥生墳丘墓）、やや遅れて4世紀中頃から後半にかけて右岸に真土大塚山（墳形不明）、小金塚（円墳、ただし前方後円墳の可能性もある）、愛甲大塚・ホウダイ山（前方後円墳）が陸続と造られる。

下総では3世紀に上る前方後方形墳丘墓（北ノ作2号、飯合作1・2号）は認められるものの、大形前方後円墳の出現は5世紀の三之分目古墳まで待たねばならない。

上総では東京湾側と太平洋側で若干様相が異なる。太平洋側では4世紀後半の柏熊古墳群のしゃくし塚や能満寺古墳といった大形前方後円墳以降、円墳と前方後円墳が造られ続ける。東京湾岸はやや複雑で、纏向型墳丘墓である神門3～5号墳や、後方部が横長の前方後方墳形墳丘墓である高部32・30号墳など3世紀に遡るものから、5世紀の大形前方後円墳である内裏塚・銚子塚・二子塚の間に造られたものには前方後円墳（手古塚・飯籠塚・天神山・今富塚山・大厩・釈迦山）・前方後方墳（鳥越・道祖神裏・新皇塚）・円墳（浅間様）と様々な墳形が見られる（石野編1995）。

こうしてみると、関東の大部分は遅くとも4世紀の後半には前方後円墳もしくは前方後方墳の造営が開始され、地域によって最初の墳形は様々であるが5世紀には首長墓は前方後円墳に

収斂するといえる。ただし、関東における古墳出現期の様相を、地域的な観点から大まかに捉えると、東山道においては前方後方墳が優勢であり、東海道においては前方後円墳が優勢であるという対照的な関係にあることが指摘されよう。

B. 弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の人とモノの移動

弥生時代後期、東遠江・菊川式土器や駿河・登呂式土器が花水川や荒川を遡上し、三河・西遠江の山中式土器は相模川を上る。他地域の土器が多量に関東に流入する時期に三浦半島は西上総とともに弥生町式土器を守る。しかし古墳時代前期になると三浦半島にも多種多量のS字状口縁台付甕が認められるようになる。この産地は愛知・静岡だけでなく、石田川式土器との関係を指摘するものもある。鉄器や青銅器も後期からさかんに東国に流入してくる。弥生時代中期には特定の石器（大型蛤刃石斧）の流入が顕著であるものの遺物として捉えられるものは少なく、後期に至って流通ともいえるほど物流が盛んになり、古墳時代前期には全国的なネットワークさえ窺われるようになる。このような中で長柄・桜山第1・2号墳は出現する。このネットワークを支えた路は陸路・海路ともにあり、それを知悉した者たちの手で滞りない物流が実現されていたことは想像に難くない。

このなかで古墳の分布が希薄な地域も散見され、代表的な箇所として北武藏の稻荷山古墳群周辺地域をあげることができる。ここは5世紀末以降になってから殷賑を極める地域である。三浦半島も状況をやや異とするが空白地帯であり、その意味からも注目されてよい地域であった。三浦半島は後の相模国域に属しつつも、南武藏や相模川流域とは地理的にやや隔たりがあり、一地域として画することができる。古墳時代前期の墓制としては方形周溝墓が知られるのみで、高塚古墳の出現は5世紀中頃の長沢1号墳からと考えられてきた。東京湾対岸の西上総や南武藏および相模中央部の状況、特に三浦半島の北側にあたる柏尾川流域で東野台古墳群（4世紀末・前方後方墳および方墳）が認められることを勘案すると、交通の要衝でありながら分布の空白を招いていた。しかしこれは後背地に低地が少なく生産性の低い地域であるということで、これまで深く考慮されることなく説明されてきたきらいがある。

そこで、長柄・桜山第1・2号墳が従前の空白地帯に発見されたことは、肥沃な後背地をもたずとも、先に述べた物流ネットワークを支えた陸路・海路双方にわたる交通の要衝にあるということに、一つの歴史的意義を求めることができる。

C. 長柄・桜山第1・2号墳の成立基盤

長柄・桜山第1・2号墳北側の逗子市域、田越川流域には弥生時代後期に至り遺跡が急増する。左岸（古墳寄りの南側）では持田遺跡・台山稻荷下遺跡・沼間台遺跡・地蔵山遺跡、右岸では披露山遺跡・池子遺跡群など豊富な遺物を有する遺跡が点々と発見され、ほとんどの遺跡

は古墳時代前期に継続する。

一方、古墳南側の葉山町域の森戸川流域や下山川流域では今のところ弥生時代に遡る遺物の出土は僅少である。堀内（No. 2）遺跡・三ヶ岡遺跡・間門遺跡の主体は古墳時代前期になってからといえる。いずれにしても肥沃な低地は極めて少なく、陸路には峻険な山地が浜に迫った地区である。

持田遺跡出土の石釧、池子遺跡群の内行花文鏡（破鏡）・銅鏡・鉄鏡といった搬入された遺物からは貧弱な地域であるという考えには至らないが、大形前方後円墳を築造できるだけの後背地であるかというと疑問を残さざるを得ない。

ここで参考になるのは日本海岸で最大の規模（107.5m）を有する前方後方墳である富山県氷見市柳田布尾山古墳の存在である。この古墳は田畠等からの生産物ではなく、富山湾の漁業権を主要な基盤として築かれたものではないかと考えられている。ちなみにこの古墳は近年国指定史跡となった。

また長野県飯田市天竜川右岸の事例も多くの示唆を与えてくれる。弥生時代後期に墳丘墓が盛んに造られた地域ながら、前期古墳はほとんど見られない。にもかかわらず5世紀中頃からは座光寺原地区では新井原12号墳、竜丘地区では兼清塚・鏡塚・鎧塚・塚原二子塚・大塚・権現堂1号などの古墳から、鏡や甲冑を始めとする優れた副葬品が多量に発見されている。これはこの時期に伊那谷でも下伊那が東山道ルートの拠点になったことを示すものである。上伊那では松島王墓しか造営されなかったことと比べれば大きな違いである。

これらの事例を顧みるまでもなく、交通の要衝である逗子・葉山に大形の前期古墳が発見されても不思議なことは何もなく、それを具現化したのが長柄・桜山第1・2号墳なのである。この発見により、太平洋岸の海上交通や古東海道を考察・論及する上では、今後避けて通れない事例を提示することになった。

D. 長柄・桜山第1・2号墳の特徴

埴輪 円筒埴輪は土留め・墓域を画す役割をもつもの、壺形埴輪は底部が焼成前穿孔で葬送儀礼に関わるものとされている。ここの壺形埴輪は長胴で、口縁部は信濃や常陸のものに類似し、4世紀中頃から後半のもの可能性が高い。普通円筒埴輪と壺形埴輪が共伴する例は今のところ南関東でこの古墳だけである。

葺石 蓟石は第2号墳にあり、地山の土丹のほかに海岸から運んだ円礫も認められる。白っぽい円礫は海に面した前方部前面に顕著で、相模湾からは白く光って見えたであろう。

眺望 第1号墳からは東京湾を隔てて房総半島が一覧できる。また第2号墳に至っては、伊豆半島や富士山を遠くに望み、眼下には江ノ島を浮かべる相模湾が大きく広がる。箱根から丹沢の山並には大山が一段と高く映える。神戸市五色塚に比肩する眺望がこの古墳の売りである。

墳形 墳形は前方後円墳である。この地域の最初の古墳が前方後円墳であるということは重要である。先に見たように東国で最初に出現する50m以上の古墳はほとんどが前方後方墳である。その中には鑑鏡や石製腕飾類・玉類および畿内系・東海系土器が出土したものもある。そして4世紀中頃から後半になると墳形は前方後円墳に移り変わる。これはヤマト政権の圧力・影響で同じ形のものが採用されたと考えるのが至当である。第1号墳の墳形については後述する。

近隣の古墳 長柄・桜山第1・2号墳の北東約4kmといった至近距離に相模と武藏の国境がある。武藏方面の動向には敏感に反応しなければならない立地と考えてよい。南武藏の核となるのは多摩川下流域の多摩川台古墳群であるが、長柄・桜山第1・2号墳とは35kmほど隔たり、相模の核となる真土大塚山古墳から秋葉山古墳群にかけては22~26km離れている。多摩川台古墳群との間には、小規模ながら東野台や殿ヶ谷に墳丘墓群が成立しており、その距離は14kmほどしかない。長柄・桜山第1・2号墳に継続する古墳であれば、大形の前方後円墳こそが相応しい。しかし近隣はおろか武藏の最南部にも後続候補は見当たらない。

長柄・桜山第1・2号墳は最初から埴輪や葺石を伴なう前方後円墳であり、畿内の直轄地であるとか、直結した人の墓であることも射程に考えられる。このようなことから長柄・桜山に副葬されたであろう品々は、当時のヤマト政権で至高とされたものである蓋然性は極めて高いのである。4世紀中頃まで遡れば、倣製でなく舶載の三角縁神獸鏡が伴なうことも夢物語ではない。日本武尊が走水から渡航する際の弟橘媛の物語は、このようなルートにあったからこそともいえよう。

E. 東海道と東山道

五畿七道でいう東海道諸国は伊賀・伊勢・志摩・尾張・三河・遠江・駿河・伊豆・甲斐・相模・上総・下総・安房・常陸の14国であり、東山道は近江・美濃・飛騨・信濃・武藏・上野・下野・陸奥・出羽の10国である。弥生時代後期以降の活発な全国的な交流によって成立した幹線ルートがその元になったことは想像に難くない。東海道は「海」の字が示すように太平洋沿いの諸国であり、海路でしか繋がっていない箇所として相模から上総ルートがある。松阪市宝塚1号墳の船形埴輪の出土を待つまでもなく、大量の物資の往来には陸路より海路の方が適していることは明白である。東海道と東山道では弥生時代後期の墳丘墓や前期古墳の形状が対照的である。前者には前方後円の形が、後者には前方後方の形が強く対応している。ただし、尾張周辺地域の三河・遠江・伊勢や東山道の美濃では前方後方墳から始るところが多いこと、近畿地方に極めて近い伊賀や近江では前方後円墳から始るところが多いことは注意すべきことであろう。しかしながら、ヤマト政権による東国経営の根幹は当初では東海道ルートを基礎においていることは明瞭である。

そして5世紀になると様相は一変する。東海道では上総を除き、巨大古墳の造営が芳しくな

くなるのである。一方東山道では上野が突出し、北武藏や下野も盛んに造墓活動を行う。上総に比べると下総はやや低調である。これはヤマト政権の東国戦略が東海道から東山道に方向転換した結果と見られる。つまり、「まつろわぬ国」＝東山道、特に上野に対するヤマト政権の姿勢が反映されていると見るべきである。

以上のようなヤマト政権の東国への勢力伸長・経略の流れの中で、長柄・桜山第1・2号墳の造営と、その後の相模・南武藏における大形古墳の消長を考えることができよう。すなわち、4世紀に入りヤマト政権による関東への勢力扶植が東海道ルートを基軸に本格的に推し進められた結果、いち早く「まつろう」ことになった、或いは相模から上総への陸海の交通・物流の要衝である地域として掌握された三浦半島の付け根に、その象徴として長柄・桜山第1・2号墳が築かれたのであろう。そして、5世紀にはいると、ヤマト政権の経略の重点が北関東へ移り、その実績、すなわち「まつろった」結果として、北関東での大形前方後円墳の造営が本格化するようになったのではなかろうか。

また、相模・南武藏で大形古墳が築かれなくなることは、在地勢力の減退をそのまま意味することではなく、前述のようにヤマト政権による経略の重点が北関東へ移った結果とも考えられる。とはいえ、5世紀の東国諸地域における大形古墳のあり方の跛行性の原因の一端は、近畿地方中枢部の王権の移動にあったとも考えられる。すなわち大和・柳本古墳群→佐紀盾列古墳群→馬見古墳群といった奈良盆地から、河内の古市古墳群や和泉の百舌鳥古墳群への政治主体勢力の移動である。このことが東海道・東山道において古墳群の消長が一律でないことと連動しているの可能性があり得る。長柄・桜山に眠っている遺物は、この複雑な状況を解き明かす鍵の一つとなることは間違いない。

結論

縷々述べてきたように、長柄・桜山第1・2号墳は古墳時代の東日本における政治・経済情勢を探る上で欠かすことのできない存在である。換言すれば、ヤマト政権の勢力伸長のバロメーターであり、古代国家成立時における物流の重要さを指し示す証しなのである。

こうした意義を有する古墳が今まで分布の知られていなかった地域で、突然それも完全に近い形で発見されたことは、相模や神奈川県の古墳時代を考える上で極めて重要である。それ以上に、古代国家の成立・統一過程に論及する場合、長柄・桜山第1・2号墳は必要不可欠な存在となるのである。

補論

以上のレポートに若干の付け足しを行ないたい。

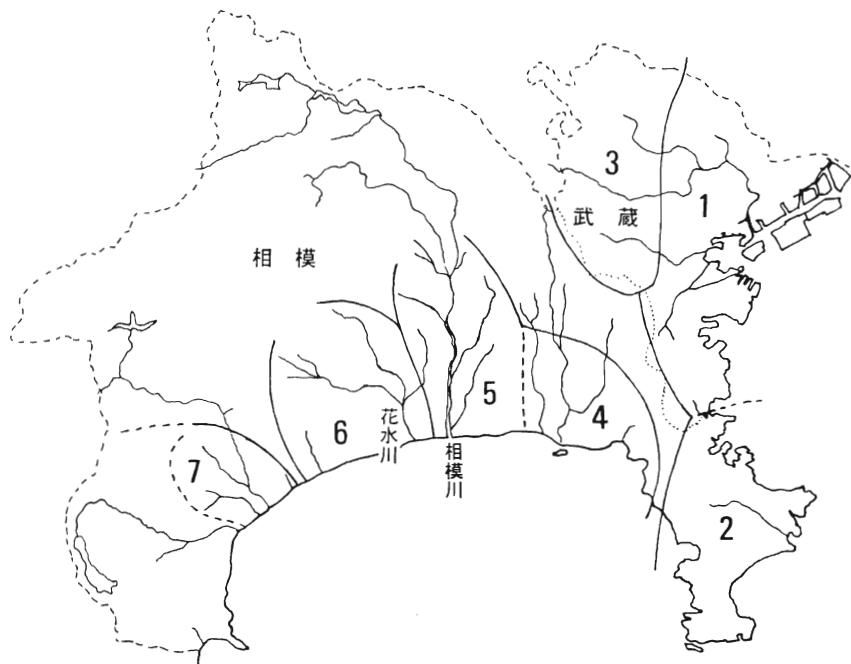


図2 弥生時代後期土器の小地域分布図

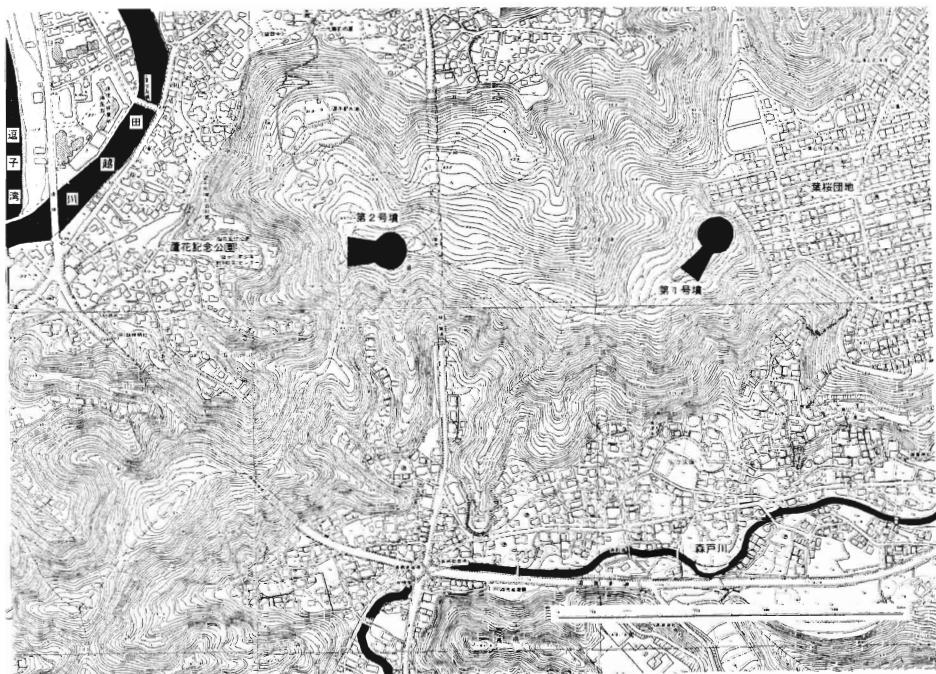


図3 古墳周辺の地形

埴輪 相模では土器の地域差が顕在化してくるのは弥生時代後期からである。図2の1・2は東京湾沿岸のもの、3は朝光寺原式、5は山中式の影響の強い地域、4は1・2と5の土器が

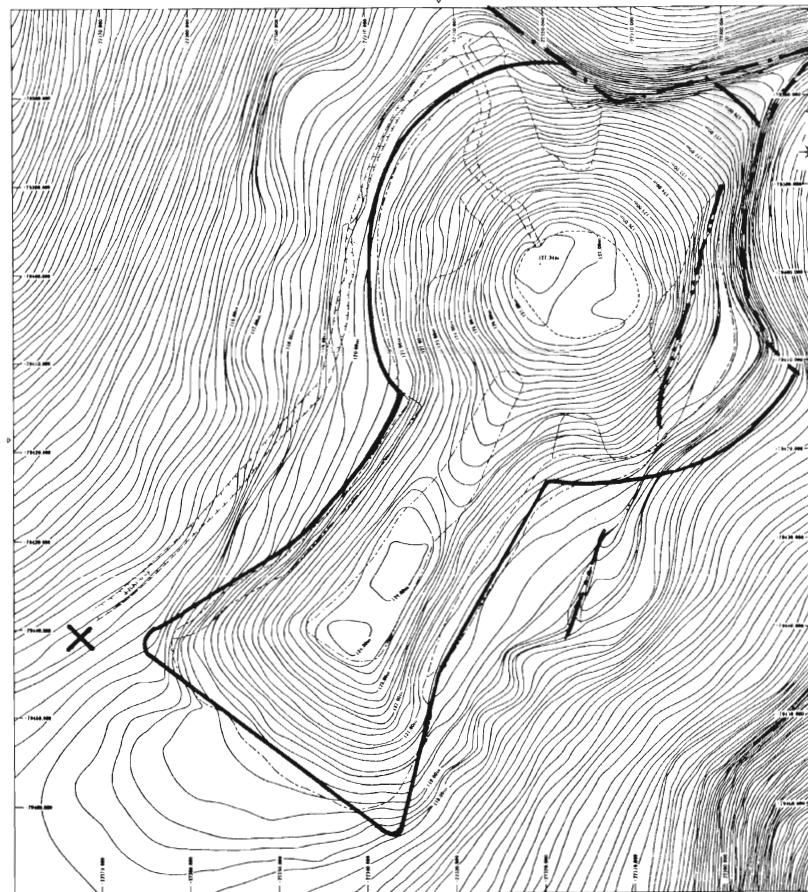


図4 第1号墳 [1/800]

混淆する地域、6は菊川式が多く見られる地域、7は駿河湾と通じる地域である。2の三浦半島の弥生後期から古墳前期の甕はナデ調整のものが主であるが、葉山町北部を西流する森戸川流域のNo. 2遺跡や三ヶ岡遺跡ではハケ調整、南部で相模湾に注ぐ下山川の南側、横須賀市に近い間門遺跡のものはナデ調整が顕著である。

雨上がりの翌日、特に1号墳では埴輪が細片で採取できる。両墳から出土した埴輪には細かいハケがよく残り、器壁は薄く剥がれやすいものが少なからず認められる。粉っぽいものや、細砂が多量に混入しているものもあり、ハケ調整台付甕と見まごうものもある。今までに出土した埴輪には大きく分けて次の三種類のものがある。

- | | |
|-----------------------|-------------|
| ① 軟質で表面のスリップが剥離しやすいもの | ② 軟質で粉っぽいもの |
| ③ 硬質でハケ調整を明瞭に残すもの | |

これらが器種の違いに起因するものまでは、全形が伺えるものが少ないこともあり詳らかではない。しかしこの胎土の違いはそのまま奈良・平安時代の土師器杯・甕にまで受け継がれている。

第1号墳について 第1号墳は後円部東端の一部は宅地造成によって削られ(図4のV字を呈す一点鎖線)、東南部は地滑りを起こしている(図4の二点鎖線は地滑り、破線は崩落)。しかし前方部の残りは良好で、発見時の観察によって先端が撥状を呈するものと考えた。しかしトレンチを入れた範囲確認調査では、くびれ部付近は表面観察よりもやや広がることが判明した。だが、箸墓古墳と比較する誘惑には抗いきれない。なお、この比はほぼ1:3である(図5)。トレンチでは墳裾が明瞭に確認できず、前方部が撥状に開く可能性も高いことは図4の×印に立つと確かめられる。東南側の墳裾から急に落ちていくにも関わらず、くびれ部から前方部にかけてのラインが東南・北東ともに同じような形で痩せていることも、この見込を裏付ける。第2号墳が墳裾から急な崖になっていることから前方部端が崩落しているか、築造時に制約を受けているように見えるのとは対照的である。

箸墓ともう少し比べてみたい。北條芳隆氏は前方部が撥形に開く古墳について前方後円墳だけでなく前方後方墳にまで範囲を広げて比較を行なった。奈良県箸墓古墳の墳丘規模を1としたとき、1/2となるものに岡山県浦間茶臼山古墳、1/3となるものに京都府五塚原古墳・元稻荷古墳・兵庫県丁瓢塚古墳、1/6となるものに岡山県湯迫車塚古墳・片山古墳・七つ塚1号墳・大塙古墳・兵庫県権現山51号墳・香川県爺ヶ松古墳を掲げる(北條1986)。また岸本直文氏も築造企画の系列について追求し(岸本1992ほか)、澤田秀実氏は箸墓系列として相似に近い墳形をまとめ、箸墓類型を抽出した(澤田1999ほか)。これらの成果に若干の事例を追加してみた(表1)。この表から読み取れることが幾つかあるが、一番重要なことは、古墳はやはり政治的産物ということを裏付けることである。石材は原産地から遠く離れるほど小さくなるのが原則だが、それとは全く違う大きさと距離の関係が見て取れる。それも東海道筋では天竜川以東では東へ行くほど大きいということである。ただこの大きさについては平地に造られたか、尾根筋に造られたかという立地にかなり制約されることは言を俟たない。

図4にもう一度戻っていただきたい。前方部端は測量図では割と平坦な尾根筋のように見えるが、現地ではかなり急に落ちており、丘尾切断による築造が伺える。

また、後円部の墳頂は近年若干削平を受けて平坦である。ここに白色粘土が散っているのを確認できる。主軸と直交する方向に3~4mほど認められ、粘土櫛の存在が推定される。墳形・規模といい、粘土櫛の存在といい、白山古墳との比較検討が今後重要なものと考えられる。

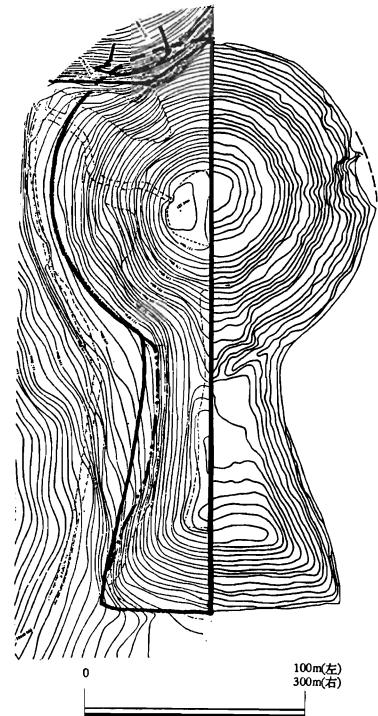
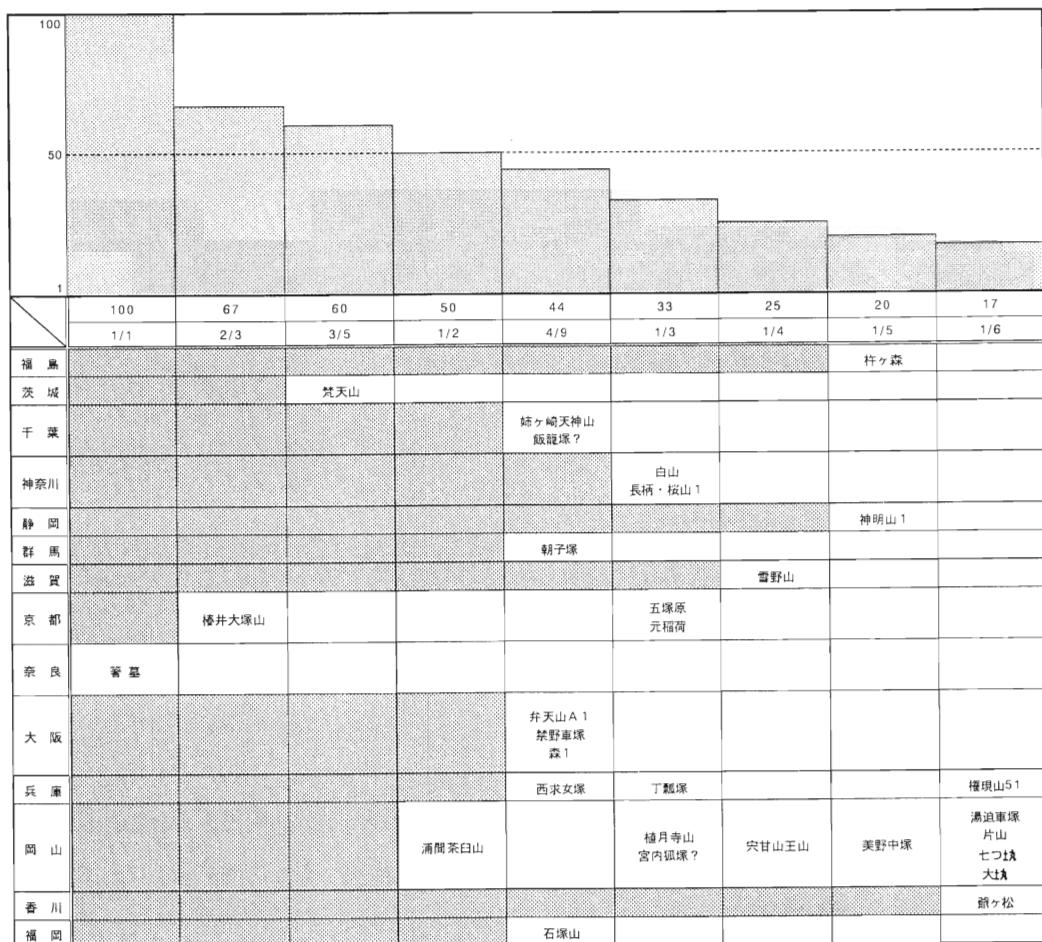


図5 第1号墳(左) [1/1,000] と
箸墓(右) [1/3,000]

表1 箸墓系列箸墓類型墳



第2号墳について 後円部の頂上の塚（図6の二点鎖線）は墳丘に伴うものか、周囲を削って塚を盛ったものは不明である。ただし塚の頂部は後円部の中心からずれており、墳丘に伴うものと考えた場合、主体部が良好に残存している可能性はほとんどない。小径を開削するためにはわざわざこの部分を残して削平するのも不自然であり、後世の塚と考えた方が無難である。その場合、主体部の痕跡は充分検出可能となる。第1号墳にも言えることだが、発見時には樹木・下草が繁茂して見通しが利かず、古墳と即断するには躊躇いがあった。特にこちらは墳裾が明瞭でなかった。下草を伐開してわかったが、第2号墳は南側の急斜面に少なからず崩落している。前方部端は特にそれが著しい。前方部前面中央や後円部の一部も崩落が認められ（図6の破線）、前方部端北側の平坦面（図6の点線 後世の削平による）の処置を含め、今後の整備にあたっては何らかの手当てが必要になろう。



図6 第2号墳 [1/800]

おわりに

はなはだ粗く拙い素描であるが、一年間この古墳と身近に付き合ってきたことを綴らさせていただいた。1998年2月に開催された本会主催の「考古学入門講座 神奈川の古墳」や2001年8月の平塚市博物館「相武国の古墳」展に併せたシンポジウムを大いに参考にさせていただき、望月幹夫・宍戸信悟・西川修一・大島慎一・池田治・北條芳隆・立花実・植山英史・柏木善治をはじめとする多くの方々から様々な教示を頂きながらほとんど活かすことはできなかった。不明をお詫びする。また編集の労をとられ、第2号墳の発見にも尽力された田村良照氏には終始励ましの言葉をいただいた。併せて感謝申し上げます。

補 記

『長柄・桜山第1・2号墳 測量調査・範囲確認調査報告書』3頁に記載された葉山町の基準点No.103のX座標は-79162.604の誤記である。また第1号墳の座標値が西に10mずれている（第1号墳後円部墳頂の標高127.34mとあるものは葉山町基準点No.106で、この座標値はX座標が-79399.052、Y座標が-22330.465である）。

文 献

調査報告

- ・ 柿渕規彰・柏木善治 2000『長柄・桜山第1・2号墳 新発見の大形前方後円墳の概要』神奈川県教育委員会・財団法人かながわ考古学財団
・ 柿渕規彰・植山英史・伊丹 徹 2000「逗子市・葉山町長柄・桜山第2号墳の試掘調査」『神奈川県埋蔵文化財調査報告42』神奈川県教育委員会
・ 柏木善治・依田亮一 2001『長柄・桜山第1・2号墳 測量調査・範囲確認調査報告書』神奈川教育委員会・財団法人かながわ考古学財団

全般（個々の古墳についての報告については割愛させていただいた）

- ・ 稲村 繁 1993～ 「三浦半島の古墳 I～」『横須賀市博物館研究報告(人文科学)』38～
・ 稲村 繁 1996～ 「神奈川県の埴輪 I～」『横須賀市博物館研究報告(人文科学)』41～
・ 神奈川県考古学会 1998『考古学入門講座 神奈川の古墳』
・ 神奈川県考古学会 2000『考古学入門講座 神奈川の古墳 討論会成果集』
・ 浜田晋介 1996・97『加瀬台古墳群の研究 I・II』川崎市市民ミュージアム考古学叢書2・3
・ 浜田晋介 2001「前方後円墳と円墳」『川崎市市民ミュージアム紀要』13
・ 平塚市博物館 2001『相武国の古墳』
・ 望月幹夫 1986「古墳時代における地域社会の一様相」『東京国立博物館紀要』22 I
はじめに～結論

- ・ 石野博信編 1995『全国古墳編年集成』雄山閣

補 論

- ・ 伊丹 徹 2001「神崎遺跡から考える」『神奈川考古』37
・ 岸本直文 1992「前方後円墳築造規格の系列」『考古学研究』39-2
・ 岸本直文 1995「『陵墓』古墳研究の現状」『「陵墓」からみた日本史』青木書店
・ 岸本直文 1996「前方後円墳の築造規格」『考古学による日本歴史 5 政治』雄山閣
・ 澤田秀実 1991「墳丘形態からみた権現山51・50号墳」『権現山51号墳』
・ 澤田秀実 1999「前方後円墳築造企画の形式学的研究」『第4回東北・関東前方後円墳研究会』
・ 澤田秀実 2000「墳丘形態からみた美作諸古墳の位置づけ」『美作の首長墓』
・ 篠原和大・石橋直也ほか 2001「清水市神明山1号墳発掘調査報告」『静岡県の前方後円墳 個別報告編』
・ 静岡県文化財調査報告書55
・ 立花 実 2002「相模 V様式」『弥生土器の様式と編年 東海編』木耳社
・ 西相模考古学研究会 2001『シンポジウム 弥生後期のヒトの移動』
・ 北條芳隆 1986「墳丘に表示された前方後円墳の定式とその評価」『考古学研究』32-4
・ 宮川 徹 2000「築造企画の伝播からみた大王墳と地域の王墳」『古代学研究』150
・ 和田晴吾 1981「日向市五塚原古墳の測量より」『王陵の比較研究』京都大学考古学研究室